

2023 年度

国府台女子学院 中学部

第一回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. **受験番号**は解答用紙の決められたところにはっきりと書いてください。
3. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
4. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、だまって手をあげ、先生にたずねてください。
5. **答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。**

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 混乱を広げないよう可能な限りのシユウソクをはかる。
- ② 物語の結末をアンにほめかす。
- ③ ヨウシユンの候。
- ④ 主役選ばれ、ボウガイの喜びだ。
- ⑤ 今度の試合もきつと何の造作もなく勝つだろう。

問二 次の()に当てはまる最も適切な語を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

まるで腫れ物にさわるような()だ。

- ア 扱い イ 動き ウ 触れあい エ 関わり

問三 次の文で説明された「野菜」の名前をひらがなで答えなさい。

ウリ科の植物の一種。夏野菜だが、秋から冬にかけて旬をむかえ、冬至には欠かせない食べものである。諸説あるが、名はカンボジアに由来しており、日本へは南蛮(特にポルトガル)から渡来したといわれている。

問四 「さける」と「よける」は同じような意味で使われているように思われますが、厳密には違いがあります。次の①～③の例文は「さける」を

使うほうが自然である文、④～⑥の例文は「よける」を使うほうが自然である文です。これらの文の違いを考えた場合、◎の文の()にはどちらの語を使うのが自然ですか。あとの記号で答えなさい。

- ① リスクをさけて行動できることが成功への第一歩だ。
 - ② 彼は山奥にこもり、人目をさけて生活している。
 - ③ はじめは苦手な問題はさけて、易しい問題から解こう。
 - ④ 目の前に転がってきたボールをよけて歩き続けた。
 - ⑤ あなたの嫌いなにんじんはよけてあるから、残さず食べなさい。
 - ⑥ あの落下物をよけていなければ、今ごろ負傷していただろう。
- ◎ 出荷の前に、不良品は()おく。

ア 「さけて」を用いるほうが自然である。
イ 「よけて」を用いるほうが自然である。

問五 「英」という漢字が持つ意味としてあてはまらないものをあとのア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

- ア イギリス イ 花 ウ 絵画 エ 名誉

問六 次の——線部のうち、どちらの使い方が正しいか。正しい方の記号を答えなさい。

- ア 目の前に広がるダイナミックな山々の景色に感動した。
イ ダンスの大会でダイナミックな演技を披露する。

問七 矢印の向きに従って読むと二字熟語ができるように、□に当てはまる漢字を答えなさい。

神 ↓ □ ↓ 屋
→ 観
快 →

問八 □にひらがなを当てはめ、次の意味に対応する言葉を答えなさい。

非常に数が多い。 …… お□□□□い

問九 次の文の□に入る語として最も適当なものをあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

病気の母を心配して□看病する娘。

ア うやうやしく イ つつましく ウ かいがいしく
エ やるせなく オ こころもとなく

問十 次の——線部の表現が正しければ○、間違っていれば正しい表現を答えなさい。

女手一人で私を育ててくれた母。

問十一 「なけなし」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

センサーに人さし指を当ててから、カード型のキーをスライドさせた。カチツと開錠の音がする。扉を開けて、安田滂は自宅に帰る。

家には誰もいない。滂は銀色のラメの入った「瞬足」スニーカーを玄関でランザツに脱ぎ捨てると、ランドセルを廊下に放った。両親は仕事だ。学童保育に行っている妹の聖の迎えには、近所に住む祖母が行くことになっている。

滂はまっすぐ冷蔵庫に向かい、母が用意しておいてくれたおにぎりとお鶏のつくねをレンジであたためた。手を洗わず、髪を梳かさず、靴下をかえず、つまりは母に言われていたことを一つも実行せずに滂はおにぎりをほおばった。

家を出る前にスマホを確認すると、母からメッセージが届いていた。

——お弁当、リュックの中に入れてあります。飲み物はペットボトルを買ってね。

「了解です」と返事をした。

今日は、学校を出る時間が二十分も遅かった。いつもの電車にはもう乗れない。どうせ塾には遅刻だ。そう思うと、いっそすがすがしいくらいの気分になって、駅までゆっくり歩いた。

ロータリーの横断歩道を渡っていると、同じ塾に通っている青木栄太郎が改札へ向かって必死に駆けていくのが見えた。

小学校で同じクラスの青木は、ひよろりとしていて背が高いから、遠目でもすぐ分かる。彼が背負っている青いリュックのサイドポケットにはいつも、緑色というにはテカリ過ぎる、亜熱帯の昆虫の羽みたいな変な色の細長い水筒が突き刺さっていて、落ちそうだなと思うけど、落ちたことはないのだから、だから今日も突き刺さっている。

——塾についた？

母からメッセージが来た。授業開始五分前だ。滯は少し迷^{まよ}ってから、「ついた」と送った。すかさず母からまたメッセージが届く。

——お手紙、学校の先生に出してくれたよね。

どきんとして、滯の指先が固くなる。ランドセルに入れっぱなしの手紙を思い出した。

「出したよ」

滯は嘘^{うそ}を書いた。すぐに母から返事が来た。

——了解^{りようかい}です。授業、しっかり集中して、がんばってね。

滯はスマホをリュックにしまった。

今日の三、四時間目、運動会の組体操について話し合いがあった。桜丘タワーをやるのか、やらないのか。意見はまとまらず、そのせいで帰りの会が長引いた。青木もわたしも、それから同じ塾に通っている佐藤杏子^{さとうきょうこ}も、今日の授業はそろって遅刻^{ちこく}だろう。いや、佐藤は母親が車で送ることも多いから、もしかしたらもう到着^{とちう}しているかもしれない。

全力疾走^{しつそう}の青木の姿は、すでに視界^{しかい}から消えてしまった。青木が急いでいるのは、授業の最初のテストが受けられないとシールをもらえないからだろ。背が高く、眼鏡^{めがね}の顔^{かほ}が思慮^{しりょ}深^{ふか}そうにも見える青木だが、しよせんはお子ちゃまだ。滯は速度を変えずに改札^{かいは}を通過^{とくわう}し、エスカレーターでゆるゆるとホームまであがった。

ホームに佇^{たまたず}む青木の姿があった。すんでのところで前の電車に行かれてしまったようだ。青木は、「あ」という顔をして滯を見た。滯はちいさく会釈^{えしやく}し、ちやうどホームに入ってきた電車に、青木とは別のドアから乗った。

扉^{とびら}の横^{よこ}に立ち、リュックから漢字テスト用の練習プリントをとりだした。今日のテストに向けて最終確認^{さいしゅうかくにん}をしておこう。構想^{こうきよう}、容易^{りようい}、準備^{じゆんび}、肥満^{ひまん}、再

起。一度間違えた漢字にだけチェックがついている。そこだけ確認^{かくにん}しておけばよい。構想^{こうきよう}、容易^{りようい}、準備^{じゆんび}、肥満^{ひまん}、再起^{さいき}……。間違えたところにはしっかりとシルシをきなさい。母^①に何度も言われたことだ。

ふと顔を上げると、民家が中心の平べったい街並^{まちな}みが振動^{しんどう}とともに後ろへ後ろへ流されて、その向こうに薄^{うす}くのぼしたようなグレーの雲があった。

雲は町全体を覆^{おほ}っていて、太陽光^{たいやうくわう}をゆるやかに遮^{かざ}っていた。

滯は漢字のプリントを手にしたまま、ぼんやりと外^{そと}を眺^{なが}めていた。

この景色を見ると、滯はいつも不思議な気分になった。どの家にも窓がある。窓の中には人がいる。わたしが一生会^あうことのない人々。その全員がそれぞれ違う小学校や中学校や高校や大学に通っている。お父さんもいるだろうし、お母さんもいるだろう。皆、別々の会社に勤^とめていて、別々の生活がある。いりくんだ世界のあちこちに、無数の人生があるのだと思うと、滯は奇妙^{きみょう}な安堵^{あんど}をおぼえた。自分はその無数の人生の中のひとつなのだ。だっ^②たら、特別なものでなくてもいいはずだ。そんなふうに思うことで、滯の気持ちはいつも少しだけ軽くなる。

「安田さん」

ふいに肩の後ろから声をかけられた。青木だった。

滯はびっくりしたが、顔に出さず、「何」と静かに訊^きいた。

A

青木が言った。

挨拶^{あいさつ}もなく、ぶしつけに本題に入る青木のこどもっぽさに、滯は内心でいらだった。無表情のまま見返すと、

B

と青木は言った。

「知ってる」

桜丘タワー、みんなが「人間タワー」と呼んでいる、組体操の演目のことだ。滂は人間タワーを見たことがない。この春、都心のタワーマンションからこの町に引っ越してきたばかりなので、去年の運動会に参加していないからだ。桜丘小の伝統だとか、一度見たら忘れられないとか、皆が異様にほめたたえるけれど、どんなものなのかイメージがわからないし、内心で、特別な訓練を受けているわけでもない小学生たちが作るものなどタカが知れてると思っっているから、さほど興味も湧かない。

滂が言うと、青木の目に共感を迫るような色が浮かんだ。

「うん。そうなんだよ。なのに、デベソたちがうるさくて、発言できなかった」

「でべそ？」

「出畑のことだよ」

「あだ名、だめなんでしょ」

「みんな言ってるよ。幼稚園の時から。あいつ実際デベソだし」

「D」

「言っても無駄だよ。あいつら、聞く耳持たないじゃん。近藤とかさ」

「ふうん」

「でも俺、今日のアンケートに意見書いたから」

得意げに、青木は 3。

「どんな意見？」

「どんなっていうか、反対意見だよ、もちろん。今、テレビでも組体操の事故のニュースとかやってるじゃん。知らない？ 自治体の中では組体操禁止にしようってところもあるし、二百キロの負荷がかかるっていう話もあるし。それなのにあんなでかいタワーを作るっていうのが、時代に逆行しているっていうこと。危ないだろ。何かあったら、誰が責任とるの。俺たち受験する

のにさ、もし右手を怪我したら、責任とれるの。もちろんそんなこと、そのまま書かないけどね。もっとマイルドに書いた。受験の内申書に差しさわらない程度に、うまくさ」

「ふうん」

「でも、どうせ俺の意見なんか無視されて、やることになるんだろうな、タワー。沖田はやる気マックスだし、あとのふたりは沖田の部下だし、デベソとか近藤とか、あいつら死ぬほどばかだし」

「ばかは『悪い言葉』だよ」

「学校の外でなら言ってもいいんだよ」

「ふうん」

電車が塾の最寄り駅に到着した。青木と滂は一緒におりて、ホームを歩いた。

「安田さんさー、引っ越してきて、桜丘小ってレベル低いと思わなかった？」

青木が訊いてきた。

「レベル？」

「今日の話し合い、すげーレベル低かったな。俺が応援団長だから何？ 応援団長は絶対に人間タワーに賛成しなきゃいけないのかよ。言論統制かよ。」

そんな決まりあるのかよ」

滂の肩のあたりを眺めながらひとりつぶつぶ不満を言っている青木に、

「青木くんは桜丘小以外の学校を知ってるの」

と訊いてみた。

「どういう意味」

「転校とか、したことあるの」

「ない」

「ない」

「そう」

滯は、青木をほほえましく感じた。おそらくは親の受け売りだろう内容をとくどくと喋しゃべって満足しているが、いきがったところで世間を知らないのだ。自分の学校がどれだけましか、分かっている。

滯は桜丘小が好きだ。秩序ちつじょがあり、統制が取れている。みんなが先生の言うことに従う。どの小学校もそうだと思ったら大間違いだ。

滯は転校してきた当初、用心しながらあたりを見まわして過ごしていた。だから、六年一組の人間関係については誰より詳しいかもしれない。男子は権力が分散していてあくどい子はいないし、女子も見た目が華はなやかな近藤あは蝶はをトップに緩ゆるやかなカーストがあるといえればあるけれど、その近藤自体がさして話してみたら、少しばかり自己顕示欲けんしよくが強いだけの、まじめな子だったから、いじめとか、変な方向にはいかなそうだ。暴力沙汰ざたは起こらないし、先生に暴言を吐はく子もいない。

前の学校には怖い子こわがいた。常に獲物えものを探して、誰かを傷つけることをよるこぶような子。滯はそういう子を見抜ぬくのが昔から早かったし、そういう子の目から隠かくれて生きるのが得意だったから、あまりひどい目に遭あうことはなかった。だけど、クラスのいじめを見て見ぬふりをするに、心はすっかり疲れていた。

怖い子がいなくてもいい。桜丘小は授業中に歩き回るような子がいなくて。テスト用紙をまるめて投げの子がいなくて。授業の始まりのチャイムが鳴ると、皆ちゃんと席につく。掃除そうじの時間だつて、たまにふざける男子はいるが、おおもねみんなきちんとやっている。誰かに押しおつけてサボる子がいなくて。前の学校では、考えられないことだった。

「桜丘小はすごい学校だと思ふよ。話し合いになつても、憲法があるから悪い言葉あんなにを言う子がいなくてね。それだけでもすごいことだと思ふ」

「そうかなあ」

あんなに貶けなしていたのに、自分の学校を褒められると青木はくすぐったそうな顔をする。

「桜丘憲法つてさ、塾のやつらに日本国憲法の真似まねじゃんて、ばかにされたけどな」

「いい憲法だと思ふよ」

本心だった。前の学校の先生に、こういうやり方があるんだよ、と教えてあげたかった。学校で憲法を作つて、一年生の時からきちんと守らせれば、学級崩壊ほろかわいになつてならなかつたかもしれない。

桜丘憲法の中では、児童が決して使つてはいけない「悪い言葉」が毎年、五つ決まっている。今年は、きもい、うざい、ぶす、しね、ばか。こどもたちにアンケートを取つて毎年選えらび直している。その言葉を使つた瞬間しゆんかん、どんな状況であつたとしても、校長室に呼ばれて、親にも報告がいくことになつているので、皆、言わないように気をつけている。うっかり言つてしまったら、すぐに謝あやまる。先生によつては居残りになることもある。他にも、あだ名をつけることや呼び捨てにすることを禁止しているし、健康な時に友達に自分の持ち物を持たせることも禁止。友達の教科書やノートに書き込みをするのも禁止。見方を変えれば規則でがんじがらめなのだけれど、むしろ小学生はがんじがらめにされるべきだと滯は思う。解⑥き放たれた獣けものみたいなこどもたち⑦がどんなに残酷ざんこくか、前の学校でさんざん見てきた。

沖田先生が、熱⑦しやすく単純な男子をうまく利用して、やりたくない派の子たちを吊つる上げたのだ。

滯は、規律をしっかりと守らせる沖田先生の統率力を気に入っていたから、その沖田先生の汚きたないところを見てしまったように感じて、暗澹あんたんとした気持ち

になった。と同時に、沖田先生がこれほどタワーを作ったがっているのに、うかうかと「反対」に手を挙げてしまったことを悔やんだ。今日、母親からの手紙を沖田先生に渡さなくて良かったと、心から思った。

「国貞がばかなことを言ったせいで、賛成派を勢いづかせたと思わない？」
青木は顔をしかめて言った。

「おまけに泣き出すしさ。あいつ、ディベートのやり方、分かってないな。痛いとか重いとか、**I** 的なことばかり言うんじゃない。組体操の事故が何件起きているとか、ある自治体は組体操を禁止したとか、**II** 的な事実を言えば良かったんだよ」

「そうかな。わたしは、どんな客観的な事実より、国貞さんの言ったことが、人間タワーの本質をついていたと思うけど」

「あれが、本質？」

青木が薄ら笑いを浮かべた。

「うん。そう思う。国貞さんが『下は重くて痛い』って言ったら、『上にあるのだから怖いんだよ』って言い返した子たちがいたけれど、『痛い』と『怖い』は別物だもの。『痛い』は **III** 的なもので、『怖い』は **IV** 的なものでしょ」

「だから？」

「その二つは比べられないっていうこと」

「そうかなあ」

「あとね、国貞さんが言っていたとおり、土台になる下の人は、上の人に、やられっぱなしだよ。何もできない。背中をぐらぐら揺るとかできるけど、それで万が一潰れちゃったら、自分の方が怪我するでしょ。だから、下の人は平たくて丈夫な背中をただ上の人のために差し出さなきゃならない。重くて、痛いの。でも、上の人は、自分の気持ちひとつで、どんなふうにも

れるでしょ。思いやりをもってそつとのももできるし、わざと踏みつけることもできる。上の人には選択肢がある。下の人にはそれが無い。圧倒的に、上にのる人が有利だよ。そういう仕組みになってるんだよ、人間がつくるピラミッドって」

青木が急に立ち止まった。青木はまっすぐ滯を見ていた。薄ら笑いが消えていた。

「すげえ。安田さん、それ、みんなの前で言えばよかったのに」

青木は真顔でそう言った。

青木の意外な素直さに動揺して、「言わないよ。わたしは上にのる側だから」
つつけんどんに滯は言った。

とたん、大きな声で、

「ひどいな、おまえ！」

青木は言った。

滯は慌てたが、青木は笑っていた。その笑顔は、さっぱりしていて、裏がなかった。だから滯は安心して、

「わたしは人間タワーには反対だけど、人間タワーをやらなくとも反対」と言った。

「は？ どういうこと？」

「今日の話し合いで、出畑くんや近藤さんの発言を聞いてたら……」

「デベツは単細胞なんだよ。近藤はうるさいだけで頭悪いし。去年、骨折した子がいるから今年はやらないだろうって、うちのお母さん言ってた。国貞の親も反対してるらしいし」

「だけどさ、青木くんは応援団長でしょ。国貞さんも選抜リレーの選手。運動会って、だいたい体が大きい子の方が、活躍の場があるじゃない。わたしとか出畑くんみたいな小さい子のほうが目立ってる種目がちよつとはあっても

いいんじゃないかって気もしない？」

そう言うと、青木はまた、黒目をふちどる白い部分が丸く見開かれるような、漫画みたいな顔をして、

「安田さんて、志望校どこななの」

と訊いてきた。

「え？」

脈絡のない質問に、滯の顔はひきつった。青木の目に邪気はない。滯はこ

わばった口角をなんとか持ち上げ、苦笑いに変えて、

「何、急に。そんなのまだ決まってないよ」

と言った。

「安田さん、言うことが天才的だから、すごいところ受かりそうだな」

青木は言った。

滯は、思ったことをすぐ口にする青木のこともつぼさに呆れた。

「じゃあ青木くんはどこなの」

そう訊くと、青木はすると難関校を挙げた。

「ふうん」

としか、滯は言えなかった。

通りを曲がると塾の看板が見えた。青木ははっとした顔になった。

「やべえ、もう始まっているじゃん。走ろうぜ」

滯が首をふるると、青木は「じゃ、俺行くから」と短く言って、躊躇なく滯をおいて駆けて行った。

残された滯はなぜだかそのまま歩き出せず、みるみる塾のビルへ吸い込まれていく青木を見送った。相変わらず、南国の虫みたいなてかてかした緑色の水筒がリュックサックに突き刺さっている。青木が激しく走ってどれだけぐらぐら揺らしても、決して落ちることのないけなげな水筒を、滯はほんや

り見つめている。

志望校どこななの。

さっき、不意打ちみたいに訊かれた。青木の無邪気なまなざし。その程度の気持ちで受験できるんだな、と、滯は思った。その程度の……ゲームみたいな感覚で。

塾に行きたくない。でも、他に行くあてはないし、家に帰ることも考えられない。

さっきまで人間タワーの話で盛り上がっていたのに、滯は自分のなかみがすっかり萎んでしまった気がした。でも、どうせわたしは今日もあのビルに入って、階段をのぼって、受付で塾証を提出して、それから教室に入って少し遅刻で授業を受けるのだ。逃げ出せないことも、逃げ出したいくないことも、自分がいちばんよく分かっている。

どうして聖とわたしは、パパやママの遺伝子を継がなかったのだろうと思う。聖もだめだったし、わたしも同じだ。きつと中学受験でも失敗する。そうしてまたママを悲しませることになる……。

二月の受験のことを思うと、滯は体がすくみそうになる。

滯は、今回の引越しの理由は、妹の聖が小学校受験に失敗したからだとか知っている。表向きは、学童保育のお迎えを祖母に頼むために、実家のある町に引越してきたことになっているけど、お迎えくらいシッターさんに頼めばいいだけのことだった。それをわざわざ引越したのは、同じタワーマンションに住んでいた子たちの中に、聖が不合格だった小学校に受かった子が何人かいたから。

——もう、無理。耐えられない。あの制服を見ないですむ町に住みたい。そう言って夜中、母が父に向かって泣いているのを、滯はこっそり聞いてしまった。

聖だって、かわいそうだった。

早生まれで、小柄な聖。しゃべりだすのが遅かった聖。なんだかよくわからないまま母に連れまわされて幼児教室に通わされ、いつの間にか受験をさせられていたのだが、不合格になってしまった時は、ちいさな目玉からぼろぼろ涙を落として「ママ、ごめんさい」と謝った。こどもに謝らせるなんて、と父は母を責めた。母も「謝らないで」と何度も聖に言っていたけれど、時おり漏れてしまう暗い溜息を、聖に何度も聞かせた。

引越してきてからも、家にいる土日も、母の笑顔にはりがないし、ときどき虚ろな目で空を見るのは変わらない。

滯は母のぼんやりした顔を見るたび胸がきりきりと痛む。

小学校受験は、低体重児で生まれた聖には不利な戦いだっただ。

でも、自分なら、できたはずだ。それなのに……。

もう忘れたことにしているけれど、実をいえば滯もかつて聖と同じ学校を受験して、不合格だった。滯と聖が入れてもらえなかったのは、母の母校だった。母の気持ちと思うと、滯は心が締めつけられる。娘をふたり産んで、そのふたりとも、母校を不合格になってしまったのだから。

でも、胸の中にちりちりと反発の気持ちも芽生えてしまうのだ。受験、させられたんだもの。したいなんて、本当は、思ってたんだもの。ママと同じ学校に行きたいなんて、思ったこともない。校庭が狭いし、男子がいななし、電車で通うのも怖いし。

でも、それが本心なのかどうかも滯には分からない。やっぱり、母と祖母が口々にほめそやすあの学校に入りたかった気もする。白いセーラー服。水色のリボン。紺に金色の線が入った上品なベレー帽。何度も何度も見せられた、物語の中の女の子みたいな制服を、着たかったような気もしている。

母の母校は中学からも生徒を募集している。中学は偏差値も低いから入り

やすいのよ、と元気づけるように母は言った。入りやすいと言うわりに、母は、滯を小学校入学と同時に進学塾に入れた。

低学年のうちには、小学校受験の貯金もあって、常にトップクラスの成績だった。そうなるも母は、自分の母校よりも偏差値の高い学校を受けて「リベンジしよう」と言った。だけど、滯は四年生のおわりくらいから、周りにじりじりと抜かれて行つた。まず算数が分からなくなった。それから理科の計算問題が解けなくなった。月の動きが、イメージできない。浮力の計算が分からない。得意の国語だけではカバーしきれないくらい、理系科目の成績が下がった。

六年生から通い始めたこの街の塾は、成績順に三つのクラスに分かれていて、滯は現在、真ん中のクラスにいる。青木は上のクラス、佐藤杏子は下のクラス。

青木は、言動はこどもっぽいのに、ものすごく算数ができる。毎週の算数テストで、青木の名前は上位十人に入っている。だから、あんなふうに屈託なく人に志望校を訊いたり、自分の行きたい学校名を口に出せるのだと滯は思う。

上に行けば行くほど、選べる学校が増えるんだ。自分の偏差値に見合った学校を志望してもいいし、校風が合うからと楽に入学できて自分がよい成績を取れる学校を選ぶこともできる。それは、さっき自分が何の気なしにしゃべった 8 に似ているんじゃないか。そう思ったら、ぞつとした。上の人には選択肢がある。下の人にはそれが無い。圧倒的に、上の人の方が有利。そういう仕組みになっている。だから上に行ける人は土台の数よりずっと少なくしなくてはならない。

でも、不思議だ。たぶんタワーの頂上を目指して努力してきて、今そこにいるはずの母は、全然幸せそうじゃない。娘の受験の失敗だけで、あんな虚

るな目になってしまいうくらい、母の立つその場所は脆いのか。

今日、母から預かった手紙の文面を、滯はほんやりと思り返す。

学校についてから、糊付けされているのをそうつと剥がして、中身を読んだ。それからもう一度封をした。沖田先生に提出しなかった。

桜丘タワーを中止してほしいと書いてあった。内容は、青木がさつき喋っていたこととほとんど同じだ。全国で起こっている事故、その後遺症、各自自治体の反応、そうしたことをこまごまと例示してあった。組体操に批判的な新聞記事の抜粋もつけられていた。そういえば青木のさつきの言葉、二百キロの負荷だとか、時代に逆行だとか、母が選んだ新聞記事の中にそのまま同じ文言があった。

『……また、私事ではありますが、娘は中学受験の準備をしており、万が一組体操による怪我等で勉強に差し支えることになりましたら取り返しがつかないことになるのではないかと危惧しております。どうか学校長、PTA、教育委員会、さらには自治体の教育課等広くご相談いただき、運動会から負傷する可能性の高い演目を外していただくべくご検討の程、よろしくお願いいたします。

安田茉優

読みながら、滯は次第に青ざめていった。この手紙を渡したら大変なことになると思った。

母は手紙の文面の序盤で自分の身分や職業を明記しているし、この手紙のコピーをとってあることまで書いてある。完全に戦闘態勢に入っている。

やめてほしい。転入したばかりの学校で、こういうの、ぜったいにやめてほしい。だいたい母はどこから人間タワーのことを聞いたのだろう。最初の保護者会を仕事で欠席しているから、まだママ友ができていないはずだ。ママ友がいたら、その中には近藤蝶の母親のようにタワーを作ってほしいとい

う人もいるだろうから、母もこんなスタンドプレイはしなかったはずだ。

滯は頭を掻きむしりたくなった。保護者会で皆の前で意見をするわけでもなく、誰か他に同じ意見の母親と相談してから共同で行動を起こすのでもなく、ただ、ひとりで思い立ち、その気分のまま自分の要求を通そうとしている母の文章は、整然としているのに、どこか滑稽で痛々しい。滑稽で痛々しいのに、この手紙には威力がある。ここまで書かれたら、さすがの沖田先生も無視はできないだろう。PTAとか教育委員会とか、自治体の教育課とか。母がそういう言葉ひとつひとつを研いだ剣を見せびらかすような感覚で書き記していることが、滯には分かる。学校は滯の母のことを、「責任をとらせる保護者」だと見る。「要注意人物」と同義だ。

いやだ。いやだ。滯は泣きたくなる。

祖母はいつも、「あなたのお母さんは昔から本当に優秀だった」「あなたのお母さんは、すばらしい仕事についている」と母を褒める。母は大学の教員をしていて、難しそうな分厚い本を数冊出している。前の学校でも、そのことはかなり有名で、学校の先生や、よそのお母さんからも、「すごいね」とよく言われた。

昔はそれがうれしかった。大学の先生って、小学校より、中学校より、高校より、ぜんぶの先生の中でいちばん「上」なんだよ。あまりに恥ずかしいことだが、そんなふうに関りの友達に自慢をしたこともある。小学校の先生よりすごいのか？ 友達に訊かれて屈託なく頷いていた幼稚な少女。

⑨今はただ、母のすごさに気圧されている。

母が、母単独ですごいのならそれでいいのだけど、母のすごさはいつも大きな波のように滯をのみこんでくる。

滯のことになると、母はすぐ頭に血がのぼる。学校や塾の先生、時には他の母親に対しても、攻撃的な絡み方をし、彼らを自分の思い通りに動かそう

とする。そうすることで、母は滯をまるごと手に入れる。いつもそうだった。低学年のころから、母はしょっちゅう学校の教員たちと揉めていた。指導の仕方、女子の人間関係の捌き方、度が過ぎるほど騒ぐ男子の取り扱い方。滯の成績が悪くなると、塾とも揉めた。指導法やカリキュラムに文句をつけて、滯の成績低下を指導者の責任にした。

母は馬鹿にされるのが厭なのだ。馬鹿を見るのが厭なのだ。馬鹿にされないように、馬鹿を見ないで済むように、一生懸命努力しててっぺんを目指してきた人だから。辿り着いたその場所で、怒ったはりねずみのように常に体中の針を立てて周りを牽制し続ける。

そのうち滯は母に騒がれるのが嫌になり、学校で起こっていることを、母に報告しなくなった。

(朝比奈あすか『人間タワー』 文藝春秋社)

問一 波線 a ~ f のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 ——線部①「母に何度も言われたことだ」とありますが、この母に対する滯の想いが想像できる行動を具体的に表した五十文字以上六十文字以内の一文をこれより前の部分から探し、初めの五字を書き抜きなさい。

問三 ——線部②「特別なもの」とあるが、滯の考える「特別」とはどういうことか。それを説明した次の文の [] に、本文中より書き抜いた漢字三字の適語を入れなさい。

偏差値の高い学校に合格し、多くの [] を持つ人になること。

問四 [A] ~ [D] に入る会話文としてもっとも適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 青木くん、なんで反対意見を帰りの会で言わなかったの
イ 青木くん、タワー練習の最後に手を挙げてたよね。反対意見言おうとしてたんでしょ

ウ 青木くん、タワー練習の最後に手を挙げてたよね。賛成意見言おうとしてたんでしょ

エ 反対に手を挙げてたよね

オ 賛成に手を挙げてたよね

カ 俺も反対した

キ 俺も賛成した

ク 青木くんはなんで賛成意見なの

ケ 青木くんはなんで反対意見なの

コ 安田さんはなんで賛成意見なの

問五 [3] に入る慣用句としてもっとも適当なものを次のア~エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目を見張る

イ 胸を張る

ウ 腕を磨く

エ 肩を怒らせる

問六 ——線部④「『悪い言葉』」にはなぜ「かぎカッコ」がついているのか。それを説明した次の文の空欄の指示に合った適語を書いて答えなさい。

ここでは、ただの悪い言葉というよりも、特に（五字以内の書き抜き）

に則^{のっと}った規則で決められている悪い言葉を指すため。

しつけて平気でサボること。

問七 —— 線部⑤「ほほえましく感じた」とありますが、滯は青木のことをどのような人物と感じているでしょうか。もつとも適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見かけは大人びていて何でも分かったような口をきくが、多くの経験を積んでいるわけではなく、親の言うことに従^{じゆうしゆん}順な人物。

イ 自分の意見を持っているように見えても、実は母親の意見に支配されていることに気づかないおっとりした人物。

ウ 勉強ができて心に余裕^{よゆう}があるため、物事にこだわりがなく誰に対しても屈^{くつた}託なく接することができる人物。

エ 自分で多くの経験を積んでいない事実から目を背け、知った風な口をきいて実力以上に自分を大きく見せようとする人物。

問八 —— 線部⑥「解き放たれた獣^{けもの}みたいな子どもたち」の残酷^{ざんぐ}な行動として滯が思い浮かべていることに当てはまらないものを、次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア カースト制がはっきりしていて、誰かを傷つけることを喜ぶような子がそのトップに立つこと。

イ 先生の言うことを聞かず、授業中に歩き回ったりテスト用紙をまるめて投げたりすること。

ウ 常にいじめる対象を探している子の目から隠^{かく}れ続け、クラスのいじめを見て見ぬふりすること。

エ 掃除の時間に、自分が与えられている仕事をせず、それを誰かに押

問九 —— 線部⑦「熱しやすく単純な男子」に当てはまる人物は次のうちどれか。当てはまる人物をすべて記号で答えなさい。

ア 出畑 イ 国貞 ウ 近藤 エ 青木

問十 I IV に当てはまる語の組み合わせとしてもつとも適当なものを次から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア I 主観	II 客観	III 状況	IV 具体
イ I 主観	II 客観	III 肉体	IV 精神
ウ I 現象	II 主観	III 根源	IV 精神
エ I 肉体	II 精神	III 主観	IV 客観

問十一 8 に入る内容としてもつとも適切な箇所^{かしよ}を本文中より探し、八字で抜き出して答えなさい。

問十二 —— 線部⑨「今はただ、母のすごさに気^け圧^おされている」とありますが、「滯の母」は本文の中でどんな人物として描^{えが}かれていますか。次から適切ではないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分とその家族が周囲から馬鹿^{ばか}にされるような状況に陥^{おち}ると気持ち不安定になってしまうほど視野^{せま}が狭く、実は心に余裕^{よゆう}がないが、そのことに自身が気づいていない。

イ 自分の正当性を信じ、それにそぐわないものを柔軟^{じゅうなん}に受け容れるこ

とができないために、結局、思うようにならない対象を攻撃し、周囲からは面倒な人と見られがちだ。

ウ 学歴や職業などの自身の肩書きが社会的な意味を持つと信じ、その外面的な肩書きに頼らざるをえない自分を自覚しているために、それをひけらかすことに余念がない。

エ 教育熱心で、娘に惜しみない愛情を注いでおり、自分なりに娘を支えるため、場合によっては学校や塾ともひるむことなく戦う姿勢がある。

オ 手作りの食事を用意したり、学校帰りの娘を心配してメッセージを送ったりと、自分がどんなに忙しくても手を抜かず、仕事も子育ても完璧であり続けようとする。

カ 母（滯の祖母）が自分にしてきたことをそのまま受け継いで子どもに向き合っており、今のよう子どもを守り支配することが悪いとは思っていない。

問十三 この文章の主人公「滯」について、A～Eの五人の生徒が話し合っています。本文から読みとれる内容として、適切ではないものを選び、A～Eの記号で答えなさい。

A 私は滯がかわいそうだと思っただわ。子供を通して自分の願望を実現させようとしている母親と毎日向き合わなければならぬなんてね。しかも母親は滯の気持ちを理解しようともせずに自分の価値観で突っ走る。こういうのを毒親っていうのかもしれないわ。

B 確かに。でも滯はそんな母親を客観視できているところがすごいよね。そんな母に完全に毒されてエネルギーを奪われてしまう子も多いだろうに、冷めた目で、どこか母を憐れんで見ているところもあるみ

たい。「母の立つその場所は脆い」とか、母の書いた手紙を「滑稽で痛々しい」とか。

C そうかな。私は滯もまあまあ母に毒されているような気がする。滯は人の立場を上とか下とかで意識する感覚が強そうだし、自分が下で支える人間の側になってもいいとは思っていない。学校や同級生のことも何気なく上からの視点で冷静に分析しているところとかね。

D そうよね、塾でも真ん中のクラスなのに、上位にいる青木のことを上から見ているところがあるよね。母をとて憎んでいるのに、母の期待に応えようとしているし、滯は本当の自分自身の気持ちや実力に気がつかず、現実がわかっていないよね。それにとてプライドが高い。

E なるほど。人間タワーについての学級での話し合いでもみんなの前で反対意見を言わないし、先生にも嫌われたくないと考えているよね。自分の立場を守ろうとしていたり、なかなか難しい子かも。でも幼少期には絶対的な存在だった母親を様々な視点から疑いだしたところに、滯の心の成長があるんじゃないかな。

二

問一

④	①
⑤	②
	③

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

い

問九

問十

問十一

二

問一

e	a
f	b
	c
	d

問二

問三

問四

A
B
C
D

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

受験番号